

だいちゃんのだいぼうけんシリーズの7  
～チョモランマ編～



～西風 そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

夜間に交じった濃い霧の中、小高い岩山の上に座る三つの影があった。

「もうすぐだよ」

「ホント？ ドキドキねー」

「風すっか、カウントダウンしてよ」

だいちゃん、風すっか、柿ただちゃんの三人は、インドとネ

パールの国境付近、山岳地帯に南下して来ていた。

今は夜明けのほんの少し前…。しんと尖った夜の空気が新しい一日に切り替わろうとする瞬間だ。

風の音が遠くに渦巻いているのが、段々に近寄って来る。

「よーし、行くよ、…」  
「おっ、…」  
「おん、…」  
「さあん、…」  
「いいい、…」

……いいーち、……

風の音がすぐ隣にやって来た

「ぜーろーろー!!」

いっしょにおおーっと風がやって来て、三人の身体を撫で上げた。柿ただちゃんの体が一瞬浮いたのを、だいちゃんが抑えてあげた。

「ほーら、やったあ!!」

風すっかが嬉しそうに叫んだ。

今の一陣の朝の風が、辺りの濃霧を一気に吹き飛ばし、三人の真正面に、高く三角に尖った白い霊峰が姿を現した。三角の一边にオレンシの筋が走り、今まさに朝の光を湛えようとしている。

「ドンビシャだ!!」

「凄だね、さすが風すっかだ!!」

「感動だわ……」

風すっかの風読みのお陰で、世界一の霊峰と最高のタイムイングで対面する事が出来た。今日はきっと良い日になるだろう。三人は大満足だった。

贅沢な景色の中、贅沢なお茶を飲みながら、堅焼きビスケをかじる。

「やーと…」とだいちゃん。

「世界一高い山も見られた事だし…」と風すっか。

「次の目標に向けて出立しましょうか」と柿ただちゃん。

だいちゃんと風すっかは、顔を見合わせて、ほーっと胸を撫で下ろした。

「どーしたのよ?」

「いや、柿ただちゃんがああ山に登りたいとか言い出したらどっしりうかつと…」

二人は本気で安心顔だ。

「失礼ね!! ただちゃんだつてあんな高い山、お散歩気分で見れない事くらい分かるわよ!」

「あはは、そうだよね、いくら柿ただちゃんだつてね…」

「……まったくよ…、失礼しちゃうわ……」

三人は荷物をまとめて霊峰を左手に眺めながら歩き出した。

また風が霧を運んで来て、頂を隠し始める。

「そういえば……」だいちちゃんがふと切り出した。

「風すっかが飛べば八千メートルなんて近い距離なんじゃないの?」

「ぶ・ぶ〜!」

柿ただちゃんが二回転半してだいちちゃんを指差した。

「横の八千メートルと、縦の八千メートルは、同じじゃないのよお〜」

「そりゃあ……」

草の馬であれだけ上下動しただいちちゃんにもそれは分かる。

目玉と胃がひっくり返りそうだったもんな。

「くすくす…あのね…」風すっかが補足してくれた。

「風ってというのは空気が動いた物なんだ。ボクたち風すっかは

空気を利用して飛ぶ。空気が薄くなると、その能力が発揮出来ないんだ」

「へえ〜」

だいちちゃんと柿ただちゃんは、ハモって納得した。

「あれだけ高度があると、さすがに空気も薄いだろう? 風すっかには無理だよ」

「え? じゃあ、高い所には風は吹かないの? そんな事ないよねえ?」

「風すっかには無理って事さ。多分、高い所には別の風の精がいて、ボク達とは違った能力で飛んでいるんだ。住んでいる所が違うから、交流はないけれどね」

「ぶ〜ん」

また知らないことが一つ埋まって、新たな知らないことが増えた。

しばらく歩くと、すっかり霧が濃くなって、景色も見えなくなってきた。

「あ!!」柿ただちゃんが叫んで二人の前に駆け出した。

来るぞ来るぞ……。

二人は慣れっこだつたが、柿ただちゃんは景色が単調で退屈

すると、すんっごくくダラナイ一発ギャグを考え付くのだ。

柿ただちゃんは、シマシマ合羽の下からスカートを引き張り出して、テテテ…と二人の周りを回った。

「シミチヨロランナ、チヨモランマ〜!」

次の瞬間、バアアーン!! と凄まじい衝撃音とショックが来て、三人は弾き飛ばされた。何なんだあ〜?!

\*\*\*

「なななな、なんなんだあ〜」

だいちゃんは頭をフルフルして起き上がった。物凄い寒気が襲って来て、体が震えて鼻水が出た。

三人がいた場所が直径十メートル程の浅いクレーターにえぐれていて、だいちゃんはその外に飛ばされていた。

クレーターの反対側で、風すっかも肩を抱いて震えながら起き上がるのを見た。

柿ただちゃんは…? 二人はキョロキョロ探した。辺りには氷の塊が散らばっている。何でか分からないけれど、寒さに弱い柿ただちゃんには危険な状況だ。

「いた!!」

クレーターから大分離れた草むらの中に、まんじゅつのよう

に丸まったシマシマ合羽が転がっていた。表面に霜が降りている。二人は慌ててシマシマ合羽をはがした。

「ふい〜…」

柿ただちゃんは丸まって震えていたが、何とか元気だった。だいちゃんが急いで懐に入れて暖めた。

三人で改めて辺りを見回した。さっきまでは、霧は出ていたけれど、暖かな春の台地だった。今は芯から冷え込んで、霜が降り電ひょうが散らばっている。

「ああ!」

クレーターの真ん中にうすくまっている『なにか』を、三人同時に見つけた。白くて半透明で、風すっかも同じくらいの大ささの、ヒト型の妖精だった。

「う〜…う〜…う〜…う〜…う〜…う〜…う〜…う〜…」

妖精は胸を押さえて、苦しそうに口をバクバクさせている。「た、大変だ!!」

あたふだしているだいちゃんの懐から、柿ただちゃんがぼーんと飛び出して、シマシマ合羽でその子の鼻と口を塞いだ。

「か…柿ただちゃんっ、何を…!」

風すっかも柿ただちゃんの隣にしゃがんで、一緒にシマシマ合羽を抑えだした。

「風すっかまで!!」

うろたえるだいちちゃんと裏腹に、苦しそうだっただ子の息が楽になってきた。風すっかが振り向いて言った。

「大丈夫だよ、だいちちゃん。過酸素症って奴。肺に入る酸素の量を少し調整してあげれば良かったんだ」

柿ただちゃんが、白い子を横向かせて、背中を撫でてあげている。だいちちゃんは、慌てて自分のシマシマ合羽を脱いで、二人を覆った。

そうこうしている内に、少しずつ気温が元に戻り、辺りの氷も溶けだしてきた。

「大丈夫?」

落ち着いてきたその子に柿ただちゃんが聞いた。

「…ウン……………」

「君、だあれ? どこから来たの?」

風すっかも聞いた。

「……………」

「答えたくないの?」

白い子は力なく首を振った。

「答えの分からない質問だったのよ」

柿ただちゃんはちょっと考えて、改めて聞いた。

「貴方はここに落ちてくる前、何をしていたの?」

「…飛んでた…」

「どついう所を?」

「いつもいる所……………」

「ん……………」

行き詰まった柿ただちゃんに、風すっかがバトンタッチした。

「飛んでいたって事は、風の精だと思っただ。ねえ、君は風を起させる?」

「風…? なに? それ…」

三人は顔を見合わせた。いくらなんでも風を知らないってあるだろうか? この子は一体何処から来たんだろう?

白い子は落ち着かない感じで身震いした。

「ここ…変…、流れがない。空気が固まってる…。気持ち悪い……………」

「……………」

「大丈夫? 落ち着くのよ」

風すっかが腕組みして目を閉じた。

「君のいた所は、風が常に吹いているのが普通だったんだね。

だから風っていう概念がないんだ。他に、君のいた所と此処と、

違う所は?」

「暑い、体が重い…。何かがボクを押し付ける。この、押し付

けるモノは、ナニ？」

「重力だよ」

風すっかがきばっと答えた。何か結論が出たようだ。

「見当ついた？」

「うん…。取りあえず、お茶でも入れようか」

\*\*\*

四人でお茶を囲んだ。白い子はまだしんどそうに横になっていたが、お茶をぬるくしてやったら、不思議そうに口を付けた。

「ジェット気流……」

風すっかがお茶をたてながらぶっと言った。

「なに、それ？」

「この星の標高八千メートル以上の上空を、常に凄いスピードで走っている風の事ね」

何で柿ただちゃんはこんなマニアックな単語にすらすら着いて来られるんだ？ これって一般知識なのか？

「そのジェット気流が、地上の急激な気圧の変化で、いきなり地上に向けて垂直に落ちこちて来る事があるんだ」

「ダウンバースト現象ね」

…だから、柿ただちゃんては……。

「じゃあ、この子はジェット気流の風の妖精だっというの？」

「ホクの推理ではね。ダウンバーストは急激な冷気を伴うんだ」

白い子は黙って三人の会話を聞いている。お茶を飲んで、少し具合がよくなったようだ。

「真合がよくなったようだ。」

「君はいつも独りで飛んでいたの？ 仲間はあるの？」

「うん、いつも一杯で飛んでる。手を繋いだり離したり…、大勢繋がったり、回ったり、…楽しいの。会いたいよ、みんなに。」

…帰りたい」

「そっか……」

八千メートル上空から降って来た子を、どうやって帰したら

いいのかわからない。

でも、ダウンバーストはそんなに珍しい事じゃない。落ちて

も帰れる道筋が、存在するのかもしれない。

「君は子供…だよな？ 大人のヒトいた？」

地上に墮ちた経験のあるヒトの話とか、聞いた事ある？」

「父様母様ごときまかさまはいるの。僕達の産みの親。でも、いつも凄い早さで飛んでて、あんまり逢えない。子供は固まって、その場でくるくる回ってるだけ。大きくならないと一緒の旅には連れて行って貰えないの」

「んー……」

「んー……」

「んー……」

「んー……」

「んー……」

また行き詰まった。

「ダウンバーストの起こる気圧の変化ってどーして起こるの？」

柿ただちゃんが口を開いた。

「え……、一般的には急激な気温の低下とか……」

何かヒントの糸口を見付けたのか？と、ちょっと期待して、

風すっかが答えた。

「ただちゃんのせいだわー!!」

急に柿ただちゃんが立ち上がった。

「ふへ？」

「ただちゃんが寒いギャグをかましちゃったから、急激に気温

が低下して、この子を地上にダウンバーストさせちゃったのよ

おー!! ああ!! ごめんなさいー——」

柿ただちゃんは白い子を抱き締めた。

「いや……柿ただちゃん、いくらなんでもそれはないだろ。確

かにあのギャグは激サムだったけれど……」

「そうだよ、いかに柿ただちゃんのギャグが氷点下だったとし

ても、気圧の低下を招くほどとは……」

「シャーラーッ!!」

柿ただちゃんが片手に白い子をヘッドロックして立ち上がった。

「ただちゃんが責任持って、必ず帰してあげるからね!!」

「ど……どーやって……」

「地上から八千メートルに続く道があるじゃない!!」

「ま……さ……か……?」

淡柿の妖精は、霧が晴れて、頂上を現した霊峰を指差して「

パツと笑った。

「無理だつて……!!」

\*\*\*

「だから、無理だつて! 何回説明したら分かるの、柿ただち

ゃん!」

白い子を背負ってずんずん歩く柿ただちゃんを、二人が前に

なり後ろになり説得する。柿ただちゃんがピタリと止まる。

「いいよ、無理に付き合わなくて。この子はただちゃん一人

で送り届ける……」

「何もそんな事、言っていないよ、柿ただちゃん、変だよ」

白い子がブルブル震え出した。

「ボクの為にケンカしないで……、ケンカしないで……」

柿ただちゃんも、白い子を振り返り、泣きそうな顔になる。

「と……かくその子は僕が背負つよ……」

だいちちゃんが白い子を受け取った。柿ただちゃんは素直に応じた。風すっかが柿ただちゃんを覗き込んだ。

「柿ただちゃん…？ 本当は、あの山に行ってみたかったの？」

柿ただちゃんはそれには答えなくて、テテテ…と走り出した。

茫然と立ち尽くす二人に、遠くから手招きする。近付くと、丘の向こうに人間の集落が見えた。

「あそこは、あの山で生計を立てている人間達の村よ」

「え…？」

「前に人間の家の窓から、テレビで見た事があるの。外国人登山隊のガイドをしたり、ポーターをしたりする人達の村」

目を凝らしてみると、山岳部落には似つかわしくない、化学繊維の色とりどりの服装をした人間達が見える。

「あの人間達の適当な人を選んで、この子をザックに乗せれば、あの山の頂ぎに連れて行って貰えるわ」

だいちちゃんはホッと胸を撫で下ろした。

「なんだあ…びっくりした。本気であの山を目指すのかと思うたよ…」

「……………」

「とにかくあの村に行ってみよう」風すっかが促した。

\*\*\*

山肌に張り付くように暮らす村だが、人々は裕福そうだった。

雑多な品物が溢れ、少数民族特有の研ぎ澄まされた感じはない。

外国人登山隊の置いていったシュラフやザックを売っている

店や、宿泊施設、食堂や、コカ茶を飲ませる茶店等もあった。

登山目的だけでなく、観光客でも賑わっているようだ。

四人は人間に見えないので、行き交うでかい登山靴に踏み潰されないように、メイン通りの端っこを歩いた。

何組かの登山隊の会話を聞き、すっかりした、ちゃんと頂上に辿り着きそうな隊に目星を付けた。

そして、その隊の宿泊所の屋根裏で一夜を明かす事にした。

明日の出立は早いらしく、隊員達は陽が沈むか沈まないかのうちに就寝した。

「柿ただちゃん…？」

人間と一緒に眠りについた四人だが、ふと目を覚ました風す

っかは、柿ただちゃんがないのに気が付いた。

村の天辺に、カウンターだけの茶店があった。

古い型の灯油ランプの前で、柿ただちゃんはぼうつと座って、

棚の酒瓶や、何かを漬けた瓶を眺めていた。



カウンターの中には、コーラで煮しめたようなお婆さんが一人でいた。

「コトリ……と音がして、柿ただちゃんの前に、小さなカップに満たされた熱いココ茶が置かれた。

「あら、お婆さん、ワタシの事が見えるの?」

「まあ、何とはなしにね。あんた、変わった匂いだねえ。何処から来なすった?」

「ずっとずっと東の国よ……」

ランプの光が柿ただちゃんの頬を照らして、深みのあるオレンジ色を作って揺らしている。

「あんたもあの山に興味を持って寄って来たのかね?」

「まあ……、そうですね……」

「あの山は儂が小さい頃から……いや、もっとずっとずっと前から、ただそこにあった。それだけの事なんだがねえ……」

「……………お茶、頂きますわ……………」

高地特有の山風が吹き、気温がグンと下がった。この風も、人の生業に関係なく、昔っから吹いていたんだろう。

明日の予定のなさそうな外国人数人が、ドヤドヤと店に入ってきたので、柿ただちゃんはおいとますることにした。

シマシマ合羽の下から大きなガマガチを取り出して、お婆さ



んを見る。

お婆さんは指を口に当てて、微笑みながら首を横に振ったが、柿ただちゃんは翡翠(ひすい)をひとかけらカフンターに置いて窓からボンと出た。

出た所で、風すっかに鉢合わせした。

「柿ただちゃん！ 心配したんだよ」

「散歩してただけだわ。でも、まあ、…ごめんなさい…」

「柿ただちゃん、なんか変だよ。何か思う所あるなら言ってみてよ」

「……………」

「ねえ、柿ただちゃんったら！」

「……………じゃあ…」

「うん？」

「少しの間だけ、別行動にしよう？」

「別行動って、何で…？」

「二人が行きたくない所に、ワタシは行きたい。それだけの事よ。待ち合わせを決めて、別々に好きな事をするの。そんなにおかしい事じゃないでしょうっ？」

「だって、柿ただちゃん、あの山に登りたいんだろっ？」

柿ただちゃんは頷いた。

「だから、あの山に登るのは無理だって言っているじゃない。ましてや、柿ただちゃんに、山頂付近の気候に耐えられる訳ないだろ」

「…どうして、間髪入れず無理だって言うの？」

「だって、…じゃあ、何で登れるって思うの？」

「登っているじゃない…、もう」

「へ…っ？」

柿ただちゃんは眉間いた丘を指差した。そして、視線をそこから足元へと滑らし、それから彼方の頂きを見やった。

「ワタシは、もう、これだけ『山登り』したの。』あの頂きを目指そう』と歩き始めた時点で、『ワタシにとっては『山登り』なのよ」

風すっかは当惑した。すぐには呑み込めない。

「それなのに、二人して、無理だ、行くなって、すっと言いつけているんだもん…」

「だって、そうだろ。あの頂きに行くのは無理だって」

「山頂に着かなきゃ『山登り』じゃないの？」

「……………」

風すっかは今度こそ思考が壁にぶち当たった。そのとおろ、

山頂に行かないで、なんの山登りだろう。でも、柿ただちゃんの『山登り』は、全然別の意味なのか？

「そうね…、風すっかにとっっては、『行ける山頂』を目標ずのが山登りなんだわ。あっ、間違っているとか、良いとか悪いとかの話じゃないのよ。ただ、『違っ考え方』の存在、それを分かって欲しいの…」

「…えと、じゃあ、具体的に、柿ただちゃんは、あの山頂を目標して歩いて、限界感じたらそこからUターンして帰って来るって…」

「現実的に言ってしまうとそうだわ。大丈夫よ、一人で行くんだし、無理はしないわよ」

「だったら、ボクも行くよ！ だいちゃんだって、きっと…」  
柿ただちゃんは首を横に振った。

「どうして？ 今までだって、宛てのない旅を三人で楽しく歩いていたじゃない」

「今度は宛てのある旅よ。しかも、到達出来ないと分かっているの。風すっか、そういうの無理でしょう？ だいちゃんだって、多分そう…」

「……………」

確かに…。今だって、柿ただちゃんが何で行くのか、半分分からない。

「それに、二人ともあの頂きを目指すつもりは毛頭ないですよ。ずっと引き返す『事だけを考えている』とは、歩いても辛いだけだわ」

「……………」

確かにそうだ。頂きを目指す気持ちは理解出来ないが、一人で行きたい気持ちは分かった。

そして、自分が無意識に柿ただちゃんを傷つけていた事も。

「白い子は？」

「あの子は責任持って帰ってあげないといけないから、人間に託した方がいいわね」

柿ただちゃんは、表情をなくして地べたを見つめている風すっかを覗き込んで言った。

「誰が悪いとか正しいとかじゃないの。多分、風すっかの考えの方が、大方の本筋よ。ちっとも間違っちゃいない。…だからさ、ここでは、ちよっと別々に楽しみましょうよ。風すっかだって、だいちゃんだって、興味を持てる物があるはずよ。そして、何日か後にこの村で落ち合いますよ。それぞれのお

土産話を持って」

風すっかは顔をあげた。柿ただちゃんの提案も有りかもしれない。ない。

でも、どこか、引っ掛かる。何か、得るはずだった大切な物を、するりと腕かいなから滑らせてしまった気分だ。

「柿ただちゃん…」

「んっ」

「一晩待ってくれる？　ボク、もしかしたら、あの山に、登りたくなるかもしれない」

\*\*\*

柿ただちゃんはい言いたい事だけ言うと、肩の荷を降ろしたように、宿に戻って寝床に入ってしまった。

さっきから風すっかは屋根の上で、月に照らされる遙か彼方の頂きを凝視している。高い……遠い……

「ダメだあ!!」

風すっかはひっくり返った。どんなに眺めても、あの山頂が自分の中で具体的にならない。ストレッチにあんな所を目指して歩き出せる柿ただちゃんって、ある意味凄い。

空が白んで来てしまった。

「ここにいたんだあ」

だいちゃんが屋根に登って来た。

「人間達は起き出して朝食を取ったりしているよ。白い子の乗りやすい背負子(しよいこ)も目星を付けた」

「だいちゃん…、柿ただちゃんがね、あの山に登りたいんだって。勿論山頂は無理だから、行き着く所まで行きたいんだって」

「へえ、昨日言いたそうだったのは、それだったのかな?」

「うん…」

「凄いな、柿ただちゃんて!」

「え…、うん、…そう、凄いなね…」

「やっぱり一人旅と三人旅の違いだなあ!　僕一人だったら思いもしないもん!」

「……………」

「そうと決まったら、少し食料も仕入れなきゃね!」

「いや…、だいちゃん、柿ただちゃんは…」

「んっ」

「ボク達は達成出来ない目標に向かっては、歩きたくないだろうって。だから一人で行くって」

「え…?　ああ、まあ、確かに頂には行き着かないだろうねえ。

でも、僕、普通に行きたいよ」

「何で？」

「そう聞かれても…、そうだなあ、あえて言うなら、今ここであの山の頂きを目指して歩けるのは、一生でただだよ、多分」  
風すっかは、頭の中で巨大な扇風機が霧を吹き飛ばしてやるような気がした。

「大人になったら役割が付いて、日本を離れられなくなる風すっかなんか、特にそうじゃないの？」

「…そうだ!! 風すっかは、手を延ばして指で輪っかを作り、山頂を入れて見た。あの山が手の中に入るのは一生でただけだ! 着ける着けないは関係なく、あそこに向かって歩く事が出来るのも、今だけ…!」

\*\*\*

白い子を人間の背負子に乗せて見送ってから、三人も別行動の準備をした。

「じゃあ…、基本、七日後、この屋根裏で。遅れるようなら鳥さんに手紙を託すわ」

「ん、じゃあね」

二人は案外あっさり柿ただちゃんを見送った。

柿ただちゃんは一人になって、頂を見ながらテシテシと歩いた。村を見下ろす展望地まで来て、腰を降ろして水筒の水を飲んだ。

「ふう…」

荷物一通りを一人で背負っているので、あまり早くは歩けない。さあ、今日は何処まで行けるだろう。

「コカ茶はいかが？」

聞きなれた声が背後でした。振り向くと、見慣れた二人が腰かけてお茶を入れていた。

「柿ただちゃんのお陰だよ。僕一人だったらあの山に登ろうなんて思い付かなかった」

「ボクも…」

風すっかが照れ臭そうに言った。

「一人だったら思いも付かない事、三人いるから旅の幅が広がるんだ。ありがと、柿ただちゃん」

柿ただちゃんは豆鉄砲食らったような顔をしていたが、二人の顔を見比べてから、

「あの山頂を目指すのよ」と、念を押した。

「そう、そして別行動だ」

風すっかが暖かいお茶のカップを差し出しながら言った。

「え、どうして？」

「あの山頂を目指せなくなったら…、限界来たら、自由解散。

一緒に止めなくてもいい、それぞれが自由に自分の限界まで登る…。」

柿ただちゃんは胸に手を置いて、しっかりと頷いた。

そして、三人それぞれのペースで、それなりに助け合いながら登って行った。

いざ登ってみると、虚しさなんてない。高度を稼ぐ度に、山頂や麓が違って見えるのが面白かった。柿ただちゃんは、これまで一人でこういう経験を積み重ねていたんだろう。

「あれあれ?！」

現れ始めた雪渓の上に誰がいる? 何と、あの白い子だ。

「ど、どうしたの?! …人間は?!」

白い子は泣き出しそうに答えた。

「凄く怖い声で喧嘩を始めたの。経験がどうのとか、年上がどうのとか。ボクあの人達こいたくない。ね、一緒にいさせて…」

柿ただちゃんはため息付いた。

「ただちゃん達は、八千メートルまでは行けないのよ」

「僕達が限界来たら通りがかりの人間に託す事になるけれど、

うん。」

風すっかに言われて、白い子は素直に頷いた。

「じゃあ、僕が背負ってあげよっか」と、だいちゃん。

「待って…」

柿ただちゃんは、何か思い付いて、風呂敷の中を探った。

「あつた!」

取り出したのは、キラキラ輝く小さな金の鈴。

先日欲待された蒼の一族に買った物だ。何かお土産を…と言われ、柿ただちゃんは大胆にも金の鈴を欲しがった。さすがに本物は無理だったが、幼い子供用のオモチャの鈴なら、と渡された物だ。

「さあ手伝って頂戴!」

柿ただちゃんは雪渓を掻き取って、雪ダルマを作り始めた。

二人もよく分からないまま手伝った。

充分な大きさになった所で、柿ただちゃんはなかなかの造型力で雪ウサギを作り上げた。

「馬みたいな大きな動物は無理だけれど、小動物なら生命を与えられるって言っていたわ」

そう言いながら、ポケットからカリカリ梅を二つ取り出して目の所に埋め、首に鈴を掛けた。

果たして、雪ウサギは耳からフシューと粉雪を吹いて、ぴよ  
こんと動き出した。

「ふふ…始めまして、ウサギさん、宜しくね」

そして、ウサギに白い子を乗せた。驚きながら見守っていた  
二人だったが、改めて聞いた。

「ねえ、柿ただちゃん、自分がその金の鈴を使って、山登りし  
ようって考えなかったの?」

柿ただちゃんはびっくりして答えた。

「何の為に? 自分の足で登る楽しさを放棄するの?」

ここで、白い子は始めて名乗った。こんなに遅いタイミング  
なのは、名前と言つものを重要視していなかったかららしい。

「ボクの名前はシェといいます」

「名前、あったの…、なんだあ…」

柿ただちゃんは愚痴ったが、だいちゃん達はホツとした。

「でも、綺麗な名前ね!」

四人は人間の登山道に添ってテクテク歩いた。時々、人間の  
パーティーに足早に抜いて行かれる。四人も鈴を付けたウサギ  
も、人間には見えないが、年端も行かないポーターが何かの気  
配に凝視する事はあった。



白い雪ウサギに乗ったレエと、三人三様な三人。

「西遊記みたいだね」

風すっかの言葉に、二人が吹き出した。

「えー？　じゃ、ただちゃんが孫悟空？」

「違つよ、孫悟空はボクだよ、ゆけ！　金斗雲！」

風すっかは風袋をぐぐらに出して、その辺をぐるりと一周した。

もう既にかなり空気が薄くて、風袋は元氣のないコウモリみたいだ。

「柿ただちゃんは沙悟浄、お皿もあるし」

「失礼ね、これは柿のヘタです！」

「えー？　じゃ、僕は猪八戒以外に選択肢ないんですかあ〜？」

三人は大笑いした。

「…さいゆうきってなあに？」

レエには着いて来られなかったようだ。

「ごめんごめん！」

三人は口々に西遊記を語り出した。有名なお伽噺だが、所々ころ覚えだ。

「あれ？　金角銀角はどんな武器を持っていたっけ」

「あれよ、ツポ！」

「瓢箪じゃなかったっけ？」

「それで呼ばれて簡単に引つ掛かるんだよな。普段からの危険意識が足りないっちゅーの！」

レエもよく分からないなりに、楽しそつだ。そんな感じで、その日は楽しく、あつと言つ間に一日を終えた。

「反省するわ…」

毛布の中で柿ただちゃんがぼつりと言つた。

「どうせこのヒト達には楽しめないって決めつけないで、まず誘ってみるべきだったのね。みんながいろんな可能性を持っているのに…」

二人は恐縮したが、何も言わなかつた。

ちつとも引き返す事なんて頭に浮かばない。このまま本当に頂きに辿り着きそうな気さえた。

風すっかがいつものようにお祈りをした。二人は慣れた口調で復唱し、少し遅れてレエもたとごとしく復唱した。

翌朝は霧だつた。暖かいパン粥を作ろうとしたが、悪いの低い温度で沸騰するのにびっくりした。例のバインバインを干した物(いつの間に柿ただちゃんはそんな物を作っていたのか)を入れたのだが、うまく戻らなかつた。

「ちよつと固かつたようね」



レエが噛みきれなくて四苦八苦していたので、だいちゃんがナイフで切ってあげた。その日は一日霧で、あんまり進めなかった。

翌日も霧だった。標高が上がるに連れて、気温も低くなってきた。寒さに弱い柿の精と、湿気に弱い風の精は、ちよっと動きが鈍ってきた。せめて少しでも天気がよくなってくれればいいんだが。

逆に、環境が厳しくなるに連れ、レエはどんどん元気になって行った。空気が薄くなると、重力から解放されたように、浮かんたり出来るようになった。この分だと八千メートルまで行かなくても、もう少して飛んで帰れそつだ。

いつしか、三人は申し合わせなくても、目標を『レエを見送ること』に据えていた。

\*\*\*

麓の村を登ってから七日が過ぎた。もう既に、日本一高い山の高度分は登ってしまった。さすがに柿ただちゃんは疲れが見えてきた。一人だったら逆に、昨日あたりリターンしていたかもしれない。

でも、今日は六日振りに霧が晴れた。周りの低い山々と雲を

足元に見て、降りるのが勿体ない気分させられた。

貴重な平地に、人間のパーティーが基地を設営していた。久しぶりに青空も見え、アタック日和なので忙しそうだ。

レエが嫌がったパーティーの人間達もいた。確かに怖い声を出す人がいる。地元のポーターを怒鳴り付けている。

自信満々に喋っていたので、実力のある人達だと思ったけれど、どうでもなかったようだ。我れが我れがと言う人達だった。

アタック隊に着いて行くポーターの青年は、八つ当たりで怒鳴られているようだ。

「ボク達の人を見る目もまだだねえ…」

風すっかが、そおっと人間の輪に入り、地図を覗き込んで来た。

「この先はクレバスが連なって、斜度もキツくなって、急に難易度が上がるみたい」

三人は顔を見合わせて頷き合った。

「レエ、僕達、これ以上行けないようだ。今なら、このアタック隊の人達に連れてって貰える」

「ボク…、イヤだなあ…」

「分かるけど、我慢して」

「ウサギを借りておけない?」

「貸してあげてもいいけれど、この先のクラスや、危険なトラバースを、この子は越えられないかもよ」

風の未裔もやはり空気の利用して飛んでいるようで、空気の薄いここでは、鈴を付けたウサギも、のすのす歩く事か出来ない。

「ボク、いっそ、ここから飛んで帰れないかしら?」

あくまで、あの人間達には、くっ付いて行きたくないようだ。

「随分嫌っているねえ。確かに、嫌な人間達だけれど、利用するだけと割り切って……」

「違つよ!」

レエは、会話が噛み合わないのがもどかしそうだ。

「山があの人達を嫌がっているから! そんな人の背中に乗っかって登るなんて、ありえない。しちヤイケナイ事なんだよ!」

「山が?」

三人は顔を見合わせた。レエとの意思の疎通に、何か抜け落ちていたようだ。

「山……山の意志なの……?」

柿ただちゃんは、何故かカウンターのの中のお婆さんを思い出した。山は人が登ろうと登るまいと関係なくそこにある……。

「山って、物を考えるの?」

だいちゃんの疑問を風すっかが受けた。

「人間やボク達みたいな思考とは違つさ。損とか得とか、欲望とか、そんなのとは違つ。そう、身近な物で例えて言うなら……指し差し笹舟に似ている」

「笹舟……?」

だいちゃんは懐から指し差し笹舟を取り出した。今は、特に指す方向はなくて、ゆらゆらしている。

「そいつは、ボク達に対して、こうしてやろうとか、親切とか、ないだろ? ただ、客観的な正しい方を指してくれるだけ」

「道具だからじゃないの?」

「ただの『物』じゃない、ちゃんと『意志』がある」

「意志……」

「そう、……うん……、強いて言葉にするなら……タダシイ方向……」

「レエの話を聞きましょう……」

柿ただちゃんが促した。

だいちゃんと風すっかの議論が横道に逸れたので、置いてけぼりになったレエは手持ちびきただ。

「山はどうしてあの人間達が嫌いな? そして貴方はどうやって山の意志を知るの?」

柿ただちゃんがゆっくり聞いた。

「あの人間達が山を嫌いだからだよ。山の気持ちはね、ボクが山と同じ気持ちになるの。ボク達、空を飛んでいて、山とお話するんだよ。それはとても楽しい事だし、ボク達を育ててくれるんだ」

三人は、ごっくん息を呑み込んだ。この七日間、自分達の話ばっかりして、思えばレエの話が聞かなかった。

「風すっかがさんが言ったみたいに、山はボク達みたいな物の考え方はしないの。怒ったり悲しんだりもしない。あるのは、夕ダシイ方向…、そして、歓び」

「怒ったり悲しんだりはしないけれど、喜ぶ事はあるの?」

「歓びだよ…、みんなで満ち足りた幸せな気分になる。例えば、くっつきりとした夜明け…! 新しい命の生まれる時…! 天

寿を全う出来た命の旅立ち…! 雲に映る虹…!」

三人は周囲の憐れだしさなど耳に入らず、レエの声に聞き入った。レエの口から言葉が発せられると、本当にその光景が目の前に浮かんで来るのだ。

弱くて小さくて口数の少ないレエだから、こんなに力のある言葉を持っているなんて、思わなかった。

心から反省した。レエの事、勝手に決めつけて、危つく知る

機会を逸する所だった。

「父様母様(と)さまかかさまが戻った時も、みんな幸せになる」

「大人のジエット気流の精?」

「ううん、大人も含めて、ボク達の大元。この山から出発して、この星を巡り、この山に戻って来る。この星の流れを創り、氣を流し、澱みを溶かす。そういうモノだって」

三人は目を見開いた。世界最高峰に住む風の精は、この星の風の大元?!

「ボク達、ここで生まれて、山に育てて貰って、世界中を駆け巡るの。父様母様(と)さまかかさまは一人一人をちゃんと知っていて、導いてくれる」

レエのわくわくした声に、三人も胸が躍って来た。自分達も山の声を聞いてみたい。大元の風の精に会ってみたい…!

「風すっかが…、ホントの本当に、もう進めないのかしら?」

風すっかが腕組みしている横で、レエがさらりと言った。

「山は、だいちゃん達の事、好きだよ」

「本当?」

「三人といると、とても穏やかで安心な気持ちになれる。これ、

山がだいちゃん達を受け入れているから」

三人はちょっと照れ臭い気分になった。大した志(こころざし)を持って登った訳でもないのに。

「あの人間達みたいに、手間暇かけて、しっかりと登っている方が偉そうなのにな？」

「うん……でも、あの人間達、山を嫌っているの」

「？ だって、好きだから、山登りするんでしょっ？ お金と体力と、命も賭けて」

「その辺、ボクにも分からない。でも、あの人間達、楽しんでる？ 飲んでる？」

「…昔は、きつと、そうだったんだよ…、あの人間達も…」

人間のアタック隊が出発するのを見過(こ)しながら、風すっかが言った。

残ったメンバーはまだ何か燻(くも)っているようで、口をきかない。

「でもね、この山は大変なんだよ。お金もかかるし、柵(さく)しながらみもかかる。そういう物(もの)を乗り越えて(こ)こにたどり着(き)くには、

置いて来(き)なきゃならない物(もの)もあったんだらうね」

柿(かき)ただちゃんが肩(かた)をすくめた。

「山頂(さんてい)にこだわらなければ、めるめる登(のぼ)れたのにな」

\*\*\*

「今日(けふ)、もうちょっと登(のぼ)ってみたい？ クレバスを見てから検

討(たず)しようよ」

やはり自分達でしエを見送(おく)りたい三人は、行ける所まで行(い)ってみる事にした。天気もいいし、あと一日(いちにち)位(くらい)は頑張(ごんぢや)れそうだ。

少し行くと、先(ま)に行(い)った人間(にんげん)達が、滞(とど)まっておっていた。

山肌(やまはだ)を巨大(きょだい)なクレバスが走り、そこに心許(こころやす)なくアルミの細(こ)い梯子(はしご)が掛(か)けられていた。クレバスは深く底(そこ)が見(み)えない。

三人(さんにん)が先客(せんきゃく)がいなくなるのを待(まち)っていると、渡(わた)り終わった人間(にんげん)達は、常設(じょうせつ)のはずの梯子(はしご)を外(はず)して向(むか)う側に置(お)いてしまった。

「どうしてあんな事(こと)するの？」

「後(あと)から来る隊(たい)への嫌(きら)がらせだねえ。山頂(さんてい)を独(ひとり)り占(し)めている時間を長(なが)くしたいんだ」

「…気持ち悪い……」

しエは苦(くる)いものを飲(の)み込んだような顔(かほ)になった。

「だから、山(やま)に嫌(きら)がられるんだ…」

だいちゃんが、柿(かき)ただちゃんにロープ(ろーぷ)をくくりつけて、向(むか)うにボ(ボ)ンと投(な)げた。柿(かき)ただちゃんはくるくると宙(そら)返(かえ)りしてきれいに着(き)地(ぢ)した。ロープ(ろーぷ)を掛(か)けて梯子(はしご)を引き寄せ、一人(ひとり)つつづつ

くろ、その上(うへ)を渡(わた)った。

「なんだか、大冒険だね」

幾つかの難所をそうやって力を合わせて越えて、一つの壁を越えた時、先の間人達が氷の斜面をトラバースしているのが見えた。

さっとしエの顔が変わった。

「山が……!!」

「どうしたの?」

あつと言つ間もなかった。白い地煙が上がったかと思うと、カラフルな色の一団は消えた。

「雪崩……!!」

風すっかが素早く風袋を引っ張り出した。

「何とか飛んでくれ!」

風袋は心許ないながらも、風すっかの必死の集中で、雪崩地点まで飛び事が出来た。柿たちちゃんが呼び掛けようとするのを、だいちゃんが口を押さえた。

「今、空気を振動させちゃダメ!」

しばらくその辺りを飛び回っていた風すっかが、一つの地点で地上に降りて、三人に手を降った。

三人が慎重に近寄ると、地元のポーターの青年が、雪の中で

もがいていた。風すっかが一生懸命雪の塊を退けている。

後から来た三人も手伝った。四人がかりでポーターを雪から引っ張り出した。

青年は動揺していたので、自力で脱出したと思ったのだろうが、「神サマ……」と呟いて、胸で手を組んだ。そして、一緒にいた雇い主を捜してキョロキョロした。

「みんな、大きな氷の下敷きになった。見ない方がいいよ……」

風すっかがシビアに言った。その瞬間、初めて風の精が見えた青年は、ちょっと飛び上がった。

「痛い! イタタタ……」

「脚が折れているかもしれないわね」

今度は真つ赤な柿の精が見えた青年は、また飛び上がった。

「イタ……イタタ……」

「動いちゃダメだよ、今、副え木するからね」

今度はよく分からない生き物だ。さすがにもう飛び上がりはしなかったが、テンパってはいる。

「か……か……神サマ……?」

「山には神サマなんて都合のいいモノはいないよ」

風すっかが静かに言った。

「ただ、山の意志があるだけ」

進行方向に、棚になって安全そうな場所があった。だいちゃん  
のシマシマ合羽に人間を乗せて、ズルズルと運んだ。

幸いなことに、青年の荷物にはツェルトとシユラフがあった。  
四人で力を併せて、青年が凍死しないように設営した頃には、  
もうとっぴり日が暮れていた。

「明日になったら別の隊が通るでしょう。梯子を外したからち  
よっと遅れるかもしれないけれどね……」

青年をシユラフに押し込んで、風すっかがまたシビアに言っ  
た。

「か…神サマ、有り難うございます……」

「だから、神サマじゃないって。ただの通りすがりの者だよ」  
標高数千メートルで通りすがりものないものだが……。

\* \* \*

本当に幸いに、その夜は風も凧いでいた。雪の原に月明かり  
が物の形をくっきり影にして、雪ウサギも影を落として遊んで  
いた。

「これも山の意志なのっ」

外で座って月を見ていたシエの隣に、風すっかが座った。

「そうなのかな？ でも、気持ちの悪さはなくなったよ」

「残酷…だよね…って、言ってもいい？」

「うん、ザンコクだよ、媚びもしない」

ツェルトでは、柿ただちゃんが甲斐甲斐しく青年の世話をし  
ている。

「ボク達があの人間を助けるのは、山の摂理に反する？」

「山はヒトの気持ちを縛り付けたりしない。ボク一人でも助け  
るよ、きつと。そもそも、風すっかささん達も、初めにボクを助  
けてくれたじゃない」

「死にそうなモノがいたら、咄嗟とっさに手を伸ばすのは、  
心あるモノの本能よー」

柿ただちゃんが仁王立ちになって現れた。片手にホカホカ湯  
気の上がるコツヘルを引きずっている。

ひやひや見ている二人の横をズリズリ歩き、山頂に向けて一  
礼してから棚の下に空けた。

「山に礼儀を尽くす事も本能であって欲しいわ」

そしてまたコツヘルを引きずってツェルトに戻った。

「柿ただちゃんて……凄いな……」

シエがツェルトを振り向きながら呟いた。

「凄いだろ……」

風すっかも呟いて月を見上げた。

行って頂戴。ただちゃんはこのヒトに付いている」

「柿ただちゃん…」

一番山頂に憧れを抱いていた柿ただちゃんだが、今は優先順位が違う。

「ボク、帰るの遅れてもいいよ。このヒトが救助されるまで」

「でも、この好天がいつまで保つか分からないわよ」

「あの…、あんた達は何なの…？ この山の精霊とか？」

青年が、不安からか会話に入りたがって、質問してきた。

「旅行者だよ、ただの」

「通りすがりにちよっとこの山に登ってみたいかなっただけ」

「へえ…、人間の旦那だけでなく、人でないモノまで登ってみたいかなるの？」

「この山は」

「ええ…そうね、貴方はあの部落で育って、この山頂に登ってみたいかなった事はないの？」

「ないね、なんでわざわざ？ って感想。だって、山は昔っからただそこにあるだけだもの」

柿ただちゃんは黙ってスプーンを口に運んであげた。

「旦那達はお金を落としてくれるし、村は潤うし。そうやって初めてこの山を意識したんだ」

「そんなもんだらうね」

「こんなに近いお月様を見せてくれるんだもん…」

月明かりの中、だいちゃんがザックを一つ引きずりながら上がってきた。風すっかとしエモ降りて行って手伝った。

「酷いもんだ…」

「嫌な事、してくれて有り難う…」

「食糧と燃料が入っていたよ。あの人、強運だね」

ツェルトに入ると、ポーターの青年が弱気になって涙ぐんでいて、柿ただちゃんが一生懸命なだめていた。

「大丈夫よ、ここ、通り道だから、明日には助けて貰えるわよ」

「外国から来た登山家の旦那達は、山頂に行く事が大事なんだ。

同じ登山家なら、本国に帰ってから公(おおやけ)になると不味

いから助けたりするけれど、地元のポーターやガイドは知らん

ぷりして見殺しにする事も珍しくないんだ…」

「……………」

ありそうな事だけに、こちらも暗い気持ちになる。

「とにかく食べて元氣出しなよ。後から来るアタック隊の雇い

人に、君の知り合いがいるかもしれないじゃないか」

だいちゃんが暖かいスープを差し出した。柿ただちゃんがス

プーンで口に運んであげる。

「ね、だいちゃん、風すっか。明日は二人でシエを連れて上へ

風すっかが言った。

「新潟にも似たような事はあるよ。昔は一杯いた鳥とか」

「じゃあ、アタック隊のポーターに選ばれても、ただのお仕事？」

「ん…いや、ちょっとだけ、わくわくする。もっとわくわくしていた旦那達、氷の下になっちまって…、せめて山頂に上げてやりたかったな…」

ここで、自分の悲観ばかりしていた青年が、初めて雇い主達の為に涙をこぼした。

その時、風の音がした。遠くから、低く、深く、轟くように。

青年は色を失った。この山の風が本気で吹いたら、こんな突き出た棚の上のツエルトなんかひとたまりもない。

しかし、小さい生き物達は顔を上げて目を煌めかせた。

「ボクを迎えに来たんだ！」

レエが最初に外に飛び出した。風すっか、だいちゃんが続く。

柿ただちゃんは不安げな青年の為にツエルトに残った。

「大丈夫よ。私達、レエを空に帰す為に登って来たのでもあるの。今、レエのお迎えが来たらしいわ」

青年は仰天しているが、もうこの目で妖精を見てしまっているの、素直に納得した。

「じゃあ、あなたの…友達？ そのレエって子は行っちゃまるのか？」

「ええ、そうね…」

「あなた、見送りを…、お別れを言いに行かなくていいのか？」

「だって貴方、一人で不安でしよう？」

「大丈夫だよ、行って来てよ」

「……………」

「早く！」

「有り難う」

柿ただちゃんも外に飛び出して行った。

さっき逢ったばかりの、人以外の生き物に命を助けられ、あまつさえ友達よりも大切にして貰えた。こんな出会いも、この山ならではの难道うか？

青年は側にあった宝石に気付かず見落としていた気分で、ツエルトの天井を見つめた。身体は痛いし、相変わらず風の音は渦巻いているけれど、なんだかも怖くなかった。

外に出た柿ただちゃんは、仰天して声も出なかった。月明かりに照らされて、空一杯に二匹の龍がとべろを巻いていた。

「父様(とよま)あ…」



白銀の龍がしエを見て頷く。

「母様かかさま…」

青銅の龍が優しげにしエを見る。

「だいちゃんと風すっかがしエを挟んで雪原に立っていた。」

「お別れだね…しエ」

母龍の方が、だいちゃん達を見て言った。

「この子が世話になり、有り難うございました」

空一杯の鈴を振るような美しい声だった。父龍が頭を降ろしてしエを乗せた。

「しエエ…！」

柿ただちゃんも駆け寄った。

「有り難う！ だいちゃん、風すっかさん、柿ただちゃん！ ポク、三人の事、すうっと忘れないよ！」

「僕達も、忘れないよ！ いろんな事、一杯教えてくれてありがとおーっ！」

二匹の龍は三人に一礼し、遙か中天に飛び去って見えなくなった。

また風がやみ、辺りはしんと静かになった。

「行っちゃったね…」

「呆気なかったね…」

「もっとしエのお話、聞きたかったけれど、仕方ないわね」

三人は、まだ空を見上げていた。

「あの辺で丁度いいかもよ。あまりたくさん聞かない方がいい話かもしれない」

「どうして？ 風すっか」

「この世の不思議は知ってしまうと、わくわくしなくなるからや」

「ああ、そうね、きつとそうなんだわね。大元は知らないままでいいのかもしれない」

柿ただちゃんはツェルトに向かって歩き始め、驚くモノを見つけて、悲鳴をあげた。

「なに?! あれーっ?!」

「しいっつ、雪崩が起きちゃうよ」

二人がクスクス笑いながら後から着いて来る。

雪原には、金の鈴を付けた雪ウサギが遊んでいた筈だが、今ははつつんはつつんの首輪を掛けた、大きな麒麟が情けなさそうに突っ立っている。

「柿ただちゃんが来る前に、父様龍が術を掛けてくれたの。あの人間を運びなさいって。昨日の人間の基地まで、限定の魔法」

「まあ…、なんて親切なの。首輪までは気が回らなかったよう



「だけれど……」

柿ただちゃんは駆け寄って、首輪を緩めてあげた。

「柿ただちゃんに対するお礼だって。人間は本当は命をなくする運命にあつたらしいけれど」

「まあ……」

柿ただちゃんは厳肅に受け止めた。自分の為に、何かを曲げてくれたんだ……。

ツェルトに入ると、青年は寝入っていた。安心したら疲れが出たのだろう。

三人もツェルトの隙間で毛布を被って寝入った。明日からは下山だ。

\*\*\*

ポーターの青年は頬を紅潮させて、麒麟の背に揺られている。時折、脚の怪我に響くようだが、それより空を翔ぶように滑らかに駆ける麒麟の不思議に魅せられてる。

「だいちゃんと風すっかか麒麟のお尻に乗り、柿ただちゃんは頭の上にチヨンと座っている。」

「出発する前に、だいちゃんと風すっかか、柿ただちゃんに――応聞いてみた。」

「その麒麟に乗れば、瞬き三回の間に山頂に行つて来られるよ」  
間髪入れず柿ただちゃんは答えた。

「そんな楽をして行つていい場所じゃないわ。日本に帰つてしばらくしてから、勿体なかったって、後悔するかもしれないけど。今は行かない事を選ぶわ」

「そう言つと思つた」

「二人は……」

「柿ただちゃんとおんなじ。山頂はそんなに大事じゃない！」  
途中、人間の別部隊とすれ違ったが、麒麟とそれに乗るものは彼等に見えない。青年は申し訳ないような顔をした。

梯子のクレバスを飛び越して、基地テントの見える窪地まで来た。

「本当は麓まで送つてあげられればいいんだけど、麒麟の魔法は逆に空気が薄い所でしか効かないの」

「いいえ、ここまで来れば、命は助かる。少し下がれば、ヘリの来られる場所がある。本当に、何てお礼を言つていいか……」

「雇い主は全滅してしまつたし、貴方、これから辛いかもしれないわね……」

「大丈夫、タベ一人になった時、考えた。生きてるだけで、この上ないって。あんたらが勇気をくれた」

「あのさ…」

風すっかがためらいがちに言う。

「さすがにこれ以上痕跡を残すわけには行かなくてさ。あんたがその麒麟を降りたら、麒麟もボクらも見えなくなる。…そして、記憶もなくなる」

「え…?」

「雪崩に遭って、気が付いたらここにいた…、って不思議体験になるって事」

「そんな…、あんた達に助けられた、この感謝の気持ちも無くしてしまうのか…?」

「分かってよ、あんたの命を助けただけでも、又シ様にとってはタブーだったんだ。記憶まで残すわけには行かないって」

青年は下を向いて、思い詰めた顔をした。

「ね、俺、誰にも喋らない。忘れた振りも出来る。あんたらの事、忘れたくないよ。タへの感謝の気持ちも無くして、現実世界に放り出されるの、怖いよ…、寂しいよ…!」

青年は必死に懇願した。柿ただちゃんが麒麟の頭の上で青年をじっと見た。

「大丈夫よ」

「え! 忘れずに済むのか?」

柿ただちゃんは静かに首を振った。

「ううん、やっぱり忘れるわ。私達の事も、タベあった事も。

でも、生きる勇氣、感謝の気持ち…、そういうものは消える種類のモノじゃない。残るわ、ちゃんと」

青年は目を輝かせた。

「本当に? ほんとう…?」

麒麟が低く嘶いた。タイムリミットが来たようだ。

\*\*\*

七日間かけて登った道を、ゆるゆる三日半で降りた。

ウサギは溶けて小さくなり、村が見える展望台で、とうとう金の鈴だけ残して消え去った。

「有り難う、ウサギさん…」

柿ただちゃんはまた金の鈴を大切に風呂敷に仕舞った。

村の宿の最初の屋根裏に落ち着く。別の隊が宿泊し、明日からの行程に思いを馳せている。

晩御飯が済んで、寝床の準備をしていると、柿ただちゃんがいない。

「まったく、どこほつつき歩いてんのか。タフだなあ」

「いいよ、そのうち帰って来るさ。ボク、疲れちゃった。おやすみ〜」

風すっかとはとっと横になってしまった。だいちゃんは疲れているけれど、まだ眠れなくて、屋根で月を眺める事にした。

たまにはこういう『思い思いの行動』もいい。

柿ただちゃんは、村の天辺の茶店のカウンターに座って、灯油ランプに照らされていた。

カウンターのの中には、コーラで煮しめたお婆さんと、今日ももう一人いた。

「それでさ…、雪崩が来て、あっと思ったら、離れたキャンプ基地の側について、次の日になっていたの。不思議だろ、お祖母ちゃん、どう思う?」

「何の不思議がある物か…」

お婆さんは、ギブスでぐるぐる巻きになった孫の脚を、杖でコツコツ触りながら答えた。

「山の神サマが救って下さったのさ。でも、悔るでないぞ、感謝の心を忘れるな。いつでも助けがある訳ではないぞ」

「分かっているよ、俺も、今度という今度は山の恐さが身に染みだ。神サマ以上の存在もね…」

「神サマ以上?」

「うん…、あれ? 俺、何でそう思うんだろ。…あ? お祖母ちゃん、そのお茶、俺の分?」

「触るでない! 罰当たりめが!」

柿ただちゃんはお婆さんにニッコリ微笑んで、手の平を弾かれて情けない顔をしている青年を見て、これまたニッコリ微笑んでから、お茶をすすった。

\*\*\*

翌日は霧だったが、その上は晴れているようだ。

「お天気霧ね。こういうのどう言うの? 狐の嫁入りじゃないでしょ?」

人間の街は落ち着かない。三人は、少し離れた森まで下って、そこではばらく登山の疲れを癒す事にした。人間に知られていない温泉が湧いているらしい。

柿ただちゃんが前になり後ろになりお喋りしている。本当にタフだ。

「また、急に倒れないでよ」

「大丈夫よー! あー!」

テテテテーっと二人の前に走り出る。

「お天気なのに霧で、エゾマシユウタヌキの嫁入り〜」

—— バアア——ン——

衝撃が走った。辺りに冷気が立ちこめる。弾き飛ばされただ  
いちゃんが起き上がると…、

「やあ!!」

元気そうなしエがぶかぶか浮かんでいた。

「レエエー!!」

風すっかも弾かれたように起き上がる。

「くすす、ボク、もうレエじゃないんだ。あの後、下に弟が七  
人生まれたから、今はナナ!!」

「ナナ………」

彼が名前を重要視しないのが分かった。彼等の名前は刻一刻  
と変わるのだ。

「なんで、また、ダウンバースト?」

「下に三人が見えて、逢いたくてさ! てへ!」

「てへ、じゃなあ〜い!!」

くぐもった声が遠くから聞こえた。柿ただちゃんが、シマシ  
マ合羽におまんじゅうのようにくるまれてシタバタしている。

だいちゃんが救出して懐に入れてあげた。

「そんな理由で簡単に降りて来て! 帰るのにどんだけ苦労す

ると思ってるのよ!」

「大丈夫だよ、前回は生まれたばかりで、何も分らないまま  
足を踏み外して落っこちたの。今はそれでも、成長しているん  
だよ…、ほおら!」

ナナはくるんと渦巻いて、小さな竜になった。小さすぎて蜥  
蜴こかげみたいだが。

「ちゃんと上昇気流の道筋も見えるようになった。ダウンバ  
ーストの直後に発生するの。あ、あった! じゃあね〜!」

「もう行っちゃうの?」

「ボクらの一生は君らから見たら凄く短い、だから急がな  
きや。あ、でも、その分速く飛べるんだよ。この星を何百周もす  
る程にね!」

ナナは、喋るだけ喋って凄く速さで上昇して行った。三人は  
ぼかんと口を開けて見送るだけだった。

だいちゃんの懐で柿ただちゃんがクシヤミをしながら言った。  
「暫くサムいギャグは封印ね」

くおしまい〜